

対人援助学 & 心理学の縦横無尽 (4)

第8回 日本質的心理学会 参加雑感



サトウタツヤ@立命館大学

1 はじめに

2011年11月26,27の両日、広島大学教授・岡本祐子大会委員長のもとで第8回・日本質的心理学会開催された。会場は安田女子大学教授・澤田英三事務局長の尽力で安田女子大学を提供していただいた。他学会のことを書くのはオカシナ感じもあるが、2013年第10回大会を立命館大学で開催する予定なので、学会の雰囲気を知ってもらえればありがたいと思い書いてみたい。自分たちで寝めるのもおかしいが、大変充実した二日間であった(感想には個人差があります)。このエッセイを通じて、学会という祝祭空間が持つ学問的興奮が伝われば、とも思う。

私が参加させてもらったのは、26日の委員会企画シンポジウム「実践としての身体」と27日の大会準備委員会企画シンポジウム「子ども理解のメソロジーとしての質的研究 実践者の研究方法としての可能性を探る」であり、いずれも指定討論としての参加であった。指定討論の指名が二つあるところに私の本学会での立ち位置が透けて見えてくるのだが、学会事務局長の立場からすると、総会の準備だけで手一杯なので、事前に丁寧な準備が必要な話題提供者よりはありがたいのであった。

2 身体というアポリア：あるいは実験装置による身体拘束

「実践としての身体」シンポジウムでは、心理と身体という古くて新しいアポリア(難問)について扱われた。様々な話題が提供されたが、私が討論として指摘したのは、なぜ心理学は身体を拘束しないと実験できないのか、ということであった。拘束された身体を対象とする心理学は、心身一元もしくは心身相関を前提にしているはずである。そうでなければ、どのような姿勢でどのようなことをしていようと「心理」を取り

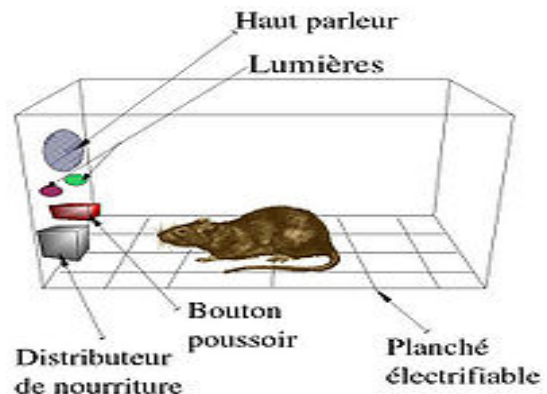
出せるはずだからである。

右図は竹井機器工業株式会社のカタログから引用掲載したものである。カタログでは、顔面固定器となっているが、一般にはあご台と呼ばれている。知覚実験において、アゴとミミを固定することで顔が動かないようにするのである。これなど、心理学の実験をする人でなければ何であるか分からないだろうが、ここまでして固定しなければいけない身体、そうしなければ取り出せない「心理」とは何なのか、が問われなければならない。



お次はスキナー箱である。弁別刺激を提示したのちに、中に入っている有機体（この場合はネズミ）が何か行動をすると、報酬が与えられることがある。その場合、ネズミは同じような行動をするようになるという仕掛けになっている。理論的な意義はともかくとして、ネズミとその行動を環境ごと外から完全に見てしまおうという意図が丸わかりであり、ネズミの行動範囲は自ずと限られたものになる。

相手がネズミでなくても同じようなことは起きる。一昔前の発達心理学実験には必ずマジックミラーがつけられていて、外から実験者が中の様子を見ることができるようになっていた。カウンセリングルームの写真は今ここで提示することを控えるが、警察の取調室と見まがうばかりのものもある。いずれにせよ、人間の行動範囲を限定したうえで対応するのが心理学という実践の本質なのだろう。



もちろん、身体拘束を前提とする心理学に反

対する動向はあり、有名なのは知覚心理学者・ギブソンによるアフォーダンスの概念である。動く身体による知覚の研究は、それまでの不動の身体を前提とする知覚心理学者たちとの折り合いが悪く、様々な軋轢が生まれていた。既に述べたことだが、身体を静止状態に制止できなければ取り出せない心理とは何なのか、一步踏み込んだ検討が必要となるだろう。蛇足ながら、質的心理学関連について考えるなら、近年のナラティブ心理学の動向も、場合によっては身体拘束の一種として捉えるべきか、物語のもつ広がりやを最大限に生かそうとする別の意図があるのか、見極めが必要となるだろう。

3 畏怖という記号：そして記述による祝福は可能か

2日目の午後、公開講演があったのを忘れていた。神戸女学院大学名誉教授の内田樹先生

による講演であった。事務局長を務めた私は総会の仕切りを終えて出席した。小さな学会の場合、学会という場で参加者が同じ講演を聴くことには意味があると思うので ynabe39 の隣に座りながら聴いていた。さすがに色々と考えさせてくれるものであった。冒頭で、質的心理学会という名前にふれつつ、今の大学は数字で測定でき予測できるものによって評価がなされているのが問題だという指摘があった。研究は度量衡で測れないものを目指さねばならないにもかかわらず、数年先の結果まで分かるような研究計画を出さないと研究資金が獲得できないのでは、研究のスケールは小さくなっていくはずである。

内田氏の講演でほかに面白かったのが、福島第一の原発事故に絡んでの話題で、インドの原発の形状についての指摘である。私は知らなかったのだが、インドの原子力発電所の形はシヴァ神に由来するものだという。インド人は原発を神のごとく敬うとか非科学的な態度で接していると考えたと見誤る。むしろ、自分たちの手ではコントロールできないかもしれない畏怖の対象として見ている



のではないかとのことである。外から見てどのようなモノに見えるのか、ということはデザインと言うことができるが、デザインはサインの配置である。シヴァ神の如き外観をデザインするということは、人々にとって原子力発電所 = シヴァ神 = 畏怖をもって見るもの、という記号を発生させることになり、その外見のあり方は、人々の原発に対する意識や行動をガイドするのである。何かあったら自分たちの手には負えないものとして、敬虔な気持ちで接することを可能にするのである。一方、我が福島の原子力発電所の外見は普通のビルであった。そこには何の畏怖もなくむしろ傲慢さの裏返しではないかとさえ思える。その結果、何が起きたのかは周知のことである。

さらに内田氏は、記述と祝福に話を進めた。何かを固有の名前で記述するということは何なのか。「固有名を固有名として記述せざるを得ないことがもつ固有性の祝福」であると私のメモにはあるが、何のことかわからない。氏があげた例はサザン・オールスターズのデビュー曲は「勝手にシンドバッド」という歌であった。その歌詞に「江ノ島が見えてきた。俺の家も近い。」というフレーズがある。ここに出てくる固有名は江ノ島である。東京方面から車で帰ってきたときに、江ノ島が見えた瞬間、その瞬間を描いている歌詞である。ここで、江ノ島としか表現できないのは、もちろん、江ノ島が固有名であるからだが、固有名を安易につかうのではなく、思考の格闘の末にギリギリの記述として用いることは、実は、その固有名を祝福していることにつながっているという。その固有名と自分の関係でしか伝えられない時空を切り取るとことのすごさである。松尾芭蕉の作であるとされる（今は疑われている）江戸時代の俳句、「松島や ああ松島や 松島や」を思い出すと、なるほどと思わされる。蛇足ながら、松田聖子の「青い珊瑚礁」の歌詞と比較する

とサザン・オールスターズの「江ノ島」への言及が祝福であることの意味はさらに明確になるように思われる。「あ～私の恋は 南の風に乗って走るわ～。あ～青い風 切って走れ、あの島へ」。この歌はギリギリの記述からも固有名の祝福からも遠いことが分かる。逆に言うとアイドルが創り出す空気の軽さ、あるいはユートピア(どこにもない場所)を創り出そうとする努力は尊敬に値するとも言える。

4 実践と研究は対立するか：あるいは質的研究の可能性

2日目(11/27)、講演の後、ynabe39(ああそういえば本名=固有名は渡邊芳之だった、あえて敬称略)と感想を述べながら、途中でそれぞれの行き先に別れ、当方はシンポジウム「子ども理解のメソドロロジーとしての質的研究」に出席した。「実践者の研究方法としての可能性を探る」という副題がついており、ここでも「実践」がキーワードであった。先のシンポジウムの実践とここでの実践は微妙に意味が違うのであるが、それでも、同じ言葉で表現できる何かであるのだから共通性があるのだろう。

このシンポジウムは、大会の運営委員でもあった広島大学・中坪史典先生の企画によるものである。「実践者の子ども理解のメソドロロジーとしての質的研究の可能性を探ること」が目的であった。こう書くと堅苦しいが、「質的研究法を用いて、「無理なく」「楽しく」「継続的に」、実践研究を行い、子ども理解を深めようではありませんか!!」ということである。具体的には、柴山真琴先生がエスノグラフィについて説明し、得丸さと子先生がTAE(Thinking At the Edge)という方法について説明するというもので贅沢なものである。そして広島大学附属幼稚園の松本信吾先生が実践者の立場からコメントをつけ、私が理論家の立場からコメントするというものであった。柴山先生はエスノグラフィについて「ある集団の人々に共有された行動パターンを構造化する信念・価値観・態度、ないしは共有された信念と社会的相互作用のパターンとの連関(Merriam, 2004)」という紹介をしてくれた。得丸先生のTAEは(ロジャーズの同僚でもありフォーカシングの創始者として知られる)ジェンドリンが開発した理論構築法を質的研究法として開発したもので、自分の中に蓄えられている感情や体験を言語化するためのステップガイドのようなものである(と私は理解した)。私のコメントは以下のようなものになった。

実践とは、固有名と固有の身体をもった、人(たち)が個別具体的な時間と場所において行われるものである。そして「偶発的=Contingent」な活動を「治める=govern」のが実践である。実践は固有の活動であるから、その場での判断が重要であるが、その判断が、個人の気まぐれに基づいてはならず、何らかの学問知に基づいていることが期待されているだろう。実践家は「いえいえ、そんなことはありませんよ」と謙遜するかもしれないが、専門家にわが子を預ける側からすれば、何の基礎もないのでは困惑してしまう。したがって、実践を研究としてまとめることの意味の一端は明らかである。実際に現場で起きていることを次代の専門家の知恵・知識・技術として伝達する、ということである。もちろん、研究は難しい。したがっ

て、全ての人が研究をすべきだ、ということにはならない。やろうとする人がいる時にガイドになるのが、方法論である。ただし、質的研究の方法論はそのようなものであり金科玉条のように扱うものでもないし、一つの方法に殉じて他のものは使わない、というような態度をとるべきではない。

討論の時にフロアから、実践活動を研究にすると、個人情報を含むとそれが研究倫理に抵触する可能性がある、どうすべきか、という問いがあった。この問いに対する答えは単純で、「研究倫理」ではなく「実践倫理」を構築していくべきだ、というものである。言うは易く行うは難し、の代表的なものではあるが、「研究倫理」至上主義はよろしくない。だいたい、実践者が実践においてうまくいったことや失敗したことを他者に伝えないということがあり得るのか？それがなぜ研究になると個人情報保護などという問題にぶち当たるのか、その構造こそが問題なのである。情報は保存・公開・共有が前提となるべきであり、その前提が個人を不必要に傷つけたりしないようにするための「実践倫理」こそが、今、求められているのではないだろうか。質的研究の方法論についても言えることだが、細かい手順を理解した上で手順通りしようとする志向があることは大変気になる。そういう細かいことではなく、原理を理解した上で、その場に即した行動を取ればよいと思う。特に、研究倫理の手順に盲従するのは好ましくないことであり、これさえやっておけば倫理問題はクリア！というようなことは絶対にあり得ないと思うべきなのである。

5 本当の雑感

二つのシンポジウムに指定討論者と参加したことで、アタマをフル回転させて学会に参加することができました。私を指定した人の意図は理論的側面からの討論だろうから、なるべく極端なことを言うように心がけました。今やれるようなことをやれるように言うのは理論家の喋ることではないのです。方法論講習会ではないのだから、やれることをやれるように喋っても意味がない。5年後に可能になりそうなことを喋らなくてはいけないわけです。

学会全体としても方法論に関する講習会や企画が盛況なのはうれしいですが、私の視点からすると「方法論は自転車の補助輪」みたいなもので、無くても走れるようになるというのが良いなあと考えています。「方法論は自転車」という考え方もありますが、いずれにせよ、方法論に固執してその手順を遵守することが目的になってはいけないと思います。

さて、個人的には九州大学教授の南博文先生が九州から来て会場係を担当していたのが感慨深かったです。南さんがいると個人的には大変落ち着きます。南さんと今回事務局長をしてくれた澤田さんは広島大学の先輩後輩の関係で、私が東京都立大学助手をやめて福島大学行政社会学部に就職する時に、私の後輩の尾見康博（これまたあえて敬称略）と一緒に訪問したことがありました。もう17,8年くらい前のことになるでしょうか。その当時の心理学の閉鎖性に窒息しそうになりながら、しかし同好の士とつな

がっていた時代です。昨今は質的研究がブームだとか言われることがあるけれど（実際、日本質的心理学会の会員は 1000 名ほどになっている）こっちは 20 年以上前から地道にやってるんだから、と言いたくなる時もあります（言っても意味無いし、今日のようにするためにやってきたわけですが）。20 年以上前からといえば、二次会で指摘されたのだけれど、（裏コンの）席替えなんてのも、今の大学生が生まれる時からやっていたとのこと、「歴史は夜作られる」とは良く言ったものです。

Last but not least（最後だからといって重要じゃないというわけではないというクラーク大学の Valsiner 教授ことヤーンがよく使う慣用句）にしき堂の生もみじまんじゅう、オミヤゲに買って帰りました。なぜなら、にしき堂のもみじまんじゅうが大会に際して 300 個！も寄付されていたからです。もとより、宣伝効果としてはカウントされない程度の数しか買ってないのが遺憾ではありますが。それにしても、前日の理事会から 3 日間、充実した会でした。来年は東京都市大学（横浜）、再来年（2013）は立命館大学で開催です。みなさん、よろしく！

引用サイト

竹井機器工業株式会社のカタログ

<http://www.takei-si.co.jp/productinfo/detail/95.html>

ウィキメディア（スキナー箱）

http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/2/2d/Boite_skinner.jpg/200px-Boite_skinner.jpg

India's atomic plants remain on terror radar: Government

<http://liveindia.tv/india/indias-atomic-plants-remain-on-terror-radar-government/>

関連サイト

日本質的心理学会第 8 回大会

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/yasuda/index.html>

日本質的心理学会（2011 年 12 月からリニューアル）

<http://www.jaqp.jp/>